

ラフカディオ・ハーン旧蔵書
『ギリシア詞華集』英語版の書き込みについて ①

中 島 淑 恵

ラフカディオ・ハーン旧蔵書 『ギリシア詞華集』英語版の書き込みについて ①

中 島 淑 恵

はじめに

富山大学附属図書館所蔵のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）旧蔵書（ヘルン文庫）には、2種類の『ギリシア詞華集』が収蔵されている。そのうち1種類は英語版で、書架番号[302] *The Greek anthology : as selected for the use of Westminster, Eton and other Public schools / literally translated into English prose, chiefly by George Burges, to which are added Metrical Versions by Bland, Merivale, and others, and an index of reference to the originals*, London, G. Bell, 1893. であり、もう1種類はフランス語版で2巻本の、書架番号[1641]と[1642]の、*Anthologie Grecque*, Tome I-II, traduite sur le texte publié d'après le manuscrit palatin par Fr. Jacobs, avec des notices biographiques et littéraires sur les poètes de l'anthologie, Paris, Hachette, 1863. であり、いずれもハーンが来日後に購入したものと思われる¹⁾。フランス語訳の2巻本についてはすでに調査結果を報告している²⁾が、本稿は英語訳『ギリシア詞華集』の書き込みについて調査を行った結果を記すもので、今回は紙幅の都合上その前半部分、276頁までの書き込みについて考察を行うものである。

1. 版本の問題

ヘルン文庫所蔵のフランス語訳『ギリシア詞華集』の2巻本は、1863年にアシェット社から出版された散文訳で、エレディアが『戦勝牌』を着想する際に参照したとされるように³⁾、一般読者を対象に、ギリシア語を解さないフランスの読者にも『ギリシア詞華集』を広く普及させたものである。これとは対照的に、同じくヘルン文庫所蔵の英語訳『ギリシア詞華集』は、その表紙に記されているように、「ウエストミンスター、イートンおよびその他のパブリック・スクールでの使用のため」の選集であり、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ教授であったジョージ・バージェス（George Burges, 1786 - 1864）の監修によるもので、これにブランド（Robert Bland, 1730-1816）、メリヴァル（John Herman Merivale, 1779 - 1844）らの韻文訳を付け加えたものである。ヘルン文庫所蔵の版は1893年のもので、このことからハーンがこの書物を来日以降に購入したことは裏付けられる。しかし、『ギリシア詞華集』の英訳本であれば、このようないわゆる教科書版でなくとも、例えば Graham R. Tomson, Richard Garnett, Andrew Lang, *Selections from the Greek Anthology*, London, W. Scott, 1889. や、J. W. Mackail, *Select Epigrams from the Greek Anthology*, London, Longmans, 1890. などを入手することも当時可能だっ

たのではないかと思われる。それでもハーンがこの版に拘ったのには何らかの理由があるのかもしれない。このことについても以下に推論を試みることにしたい。

2. 裏見返しの書き込み

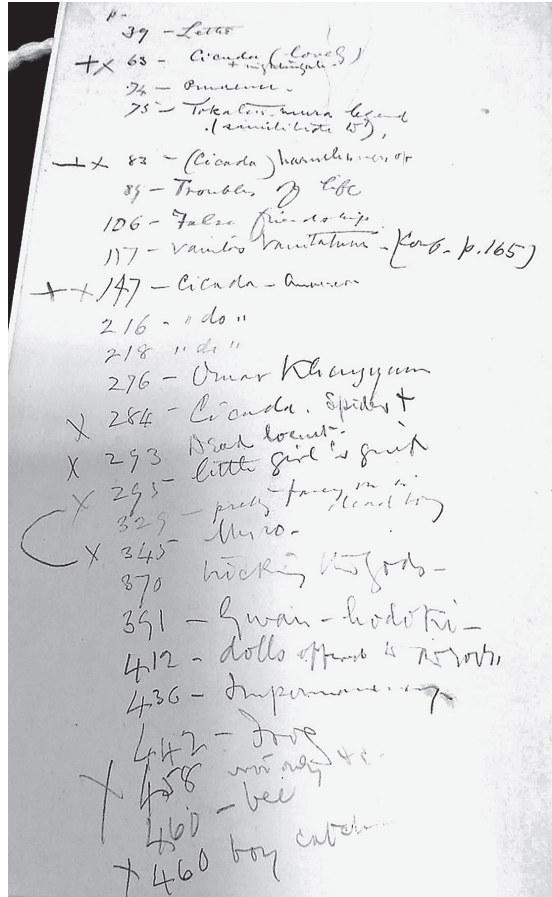
ハーンはアメリカ時代からの習慣として、裏表紙または裏見返しに、関心のある箇所を鉛筆で書き込んでいたことがこれまでに判明しているが、この英語訳『ギリシア詞華集』にも、やはり裏見返しにおびただしい書き込みがある。通例として数字は頁数を示し、該当の頁の左または右余白に、同じく鉛筆書きで縦に線が引かれている。数字の後には、ハーンが関心を持ったと思われるテーマが主に英語で示されているが、場合によってはフランス語や日本語であることもあり得る。

2-2. 裏見返し左側の書き込み

裏見返し左側には、【写真1】のように、おびただしい数の書き込みがある。すべて鉛筆書きで、他の書き込みとの比較から、ハーンの手になるものと推定できる。左側には×印が一つないし二つ付けられているものもある。

以下にその転記を示す。なお、網掛けになっている部分は、現時点で判読できない箇所である。

- p.
 39 - Lethe
 × + 63 - Cicada (loves)
 + nightingale
 74 - Prudence
 75 - Takatsu-mura legend



【写真1】

(similitude W?)

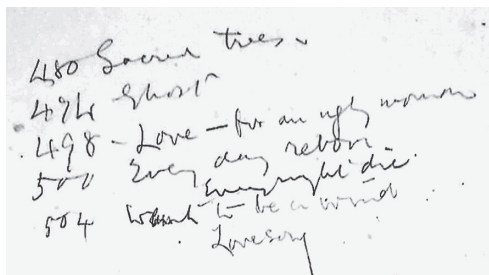
- 82 - (Cicada) harmless of
89 - Trouble of life
106 - false friendship
117- vanitas vanitatum (comp. p. 165)
× × 147 – Cicada anacreon
216 - “ do “
218 “ do “
276 - Omar Khayyam
× 284 - Cicada, Spider +
× 293 - Died locust
× 295 - little girl's grief
329 - pres-fancy on a dead boy
× 345 - Myro
370 - tricking
391 - Gwan-hodoki
412 – dolls offend is wrong
436 –
442 – frog
× 458-
460 – bee
460 – boy cathes

2 – 3. 裏見返し右側の書き込み

左側に続く形で、裏見返し右側にも【写真2】のように同様の書き込みがある。

以下にその転記したものを示す。

- 480 – sacred tree
494 – ghost
498 – Love for an ugly woman
500 – Every day born
Everything dies
504 – wish to be a wind Lovesong



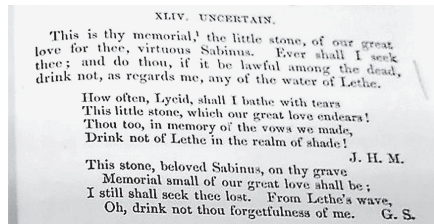
【写真2】

3. 本文該当頁の書き込みとその内容

以下に、それぞれの該当頁に記載されている本文とその書き込みについて順に検討を加えることにする。

3-1. 39頁

裏見返し左側に、「レテ (Lethe)」と書き込みのあった箇所は、本文では【写真3】のように、右余白に鉛筆で縦に線が引かれている。この一節は特にハーンの関心を惹いた箇所であると思われる。以下に引用を示し、その内容を確認しておきたい。



【写真3】

XLIV. UNCERTAIN

This is thy memorial, the little stone, of our great love for thee, virtuous Sabinus. Ever shall I seek thee, and do thou, if it will be lawful among the dead, drink not, as regards me, any of the water of Lethe.

これは君のための記念の、小さな石、我々の君に対する大きな愛の、徳高きサビヌスよ。私は永遠に君を探し求めるし、君もそうしたまえ。死者の国でもそれが有効ならば、私のために、レテの水を少しも飲まないでおくれ。

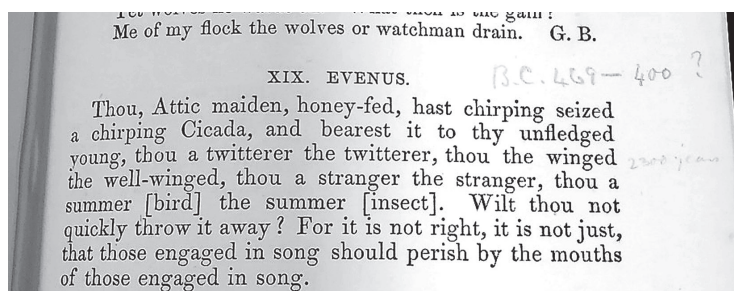
この逸名の碑銘詩は、沓掛良彦によれば「本物の墓碑銘」⁴⁾であり、死んだ友（徳高きサビヌス）に対して、飲めば現世のことをすべて忘れてしまうという忘却の河レテの水を飲まないで欲しい、と願うものである。ギリシア神話を知る者にとってはむしろ陳腐な常套句の様相を呈するこの碑銘詩は、しかしハーンを知る者にとってはあながち無意味なものではない。というのもハーンは、1883年5月27日付の『タイムズ・デモクラット』紙に掲載されたコラム「日本の詩瞥見」の末尾で、「自らの死後も夫の姿を損ねることなく保ちたいと願って最後に今一度夫の姿を見たいという妻の願い (the desire of the Japanese bride for a last look at her husband's face, that she might carry a perfect memory of him into the world of shadows)」を、「恋人を忘れないように、死後もレテの水を飲まないで欲しいと願う古いギリシアの墓碑銘と同じくらいに美しい (is surely beautiful as the old Greek epitaph in which the beloved dead is besought not to quaff the waters of Lethe, lest she forget her love)」⁵⁾と讃えているからである。

性別の違いはあるものの⁶⁾、忘却の河であるレテの水を飲まないように願う碑銘詩はこの他になく、このコラムの出典はやはりこの碑銘詩なのではないかと思われる。もちろん、ヘルン

文庫所蔵の英語版は1893年の出版であり、1883年に発表されたコラムが同書を参照した訳ではないことは明白である。しかし、英語版に書き込みがある以上はこの碑銘詩がハーンの心に深く刻まれており、1883年の時点でももちろんこの碑銘詩をハーンはよく知っていたのではないかという推測が成り立つ。もちろんそれは、アメリカ以降に図書館などで積んだ読書体験によるものとも考えられるのであるが、それよりはむしろもっと昔、英国で中高生時代を送っていたハーンが、教科書として学んだものとも考えることもできるのではないだろうか。そう考えるとヘルン文庫所蔵英語版の『ギリシア詞華集』が、大人の読者に向けて書かれたものではなく、「ウエストミンスター、イートンおよびその他のパブリック・スクールでの使用のため」の選集である理由がおぼろげながら見えてくるようにも思われる。同書の前書きによれば、初版は1852年であり、ウエストミンスターおよびイートン校での使用に供するために選ばれたテキストの他、当時ダーラム大学のギリシア語教授であったジョン・エドワーズによる選集がすべて収められているとのことである⁷⁾。ハーンが学んでいたセントカスパーツ校はダーラム大学附属であり、そこでこの英語版『ギリシア詞華集』が教科書として用いられていたとしても、不自然なことではないだろう。そう考えれば、後に日本で教師となったハーンが、自らの中高生時代を思い出して教科書版の『ギリシア詞華集』を購入し、諳んじるほどよく覚えていてコラムにも引用したかの碑銘詩をこの版で見つけ、改めて書き込みを残した、とも推測できる。いずれにしてもこの碑銘詩が、ハーンの脳裏に深く刻まれていたものであったことは間違いないであろう。

3-2. 63頁

裏見返し左側に「セミ(恋する) + ナイチンゲール (Cicada (loves) + nightingale)」⁸⁾と書き込みのあった63頁の本文には、【写真4】のような書き込みがある。



【写真4】

まず、エウエノスという作者名の右に、B.C. 469-400? という書き込みが見られるが、これはエウエノスの生没年であると思われる。その下に 2300 years とかろうじて読み取れる書き込みがある。これはおそらく、ハーンがこの書き込みを行った時点から2300年前という意味であろうと考えられ、ハーンが1900年頃にこの書き込みをここから行ったことが推測できる。

詩の内容は1900年頃にハーンが強い関心を抱いていたと思わるセミに関するもので、また、裏見返しの書き込みにも見られるように、夏の夜に啼く鳥（すなわちなイチンゲール）の記述もみられる。

これを裏付けるように、東京帝国大学におけるハーンの講義録⁹⁾を繙くと、「虫に関する古代ギリシアの詩」という講義の中でもこの詩は引用されており、以下のように紹介されている。

But the most remarkable poem about a cicada in the whole Greek collection is a little piece 2300 years old, attributed to the poet Evenus. It was written upon the occasion of seeing a nightingale catch a cicada. Evenus calls the nightingale was a daughter of an ancient king of Attica; her name was Philomela, and she was turned into a bird by the gods of pity for her great sorrow. (p. 442)

しかし、ギリシアの集大成全体の中で、セミについての最も特筆すべき詩は、2300年前に書かれた、詩人エヴェヌスによるものとされる小品である。この詩は、夜啼き鶯がセミを捕まえる様子を見て詠まれたものである。エヴェヌスはナイチンゲールをアッティカの古い王の娘であるとよび、その名はフィロメラで、彼女を哀れんだ神々によって鳥に姿を変えられたのだという。

この中の2300年前という記述も先の書き込みと一致するうえに、ナイチンゲールという記述も、本文中では用いられていないにも関わらず、裏見返しの書き込みには見られたように、ハーン自身の解釈がこの紹介に反映されているものと考えることができる。

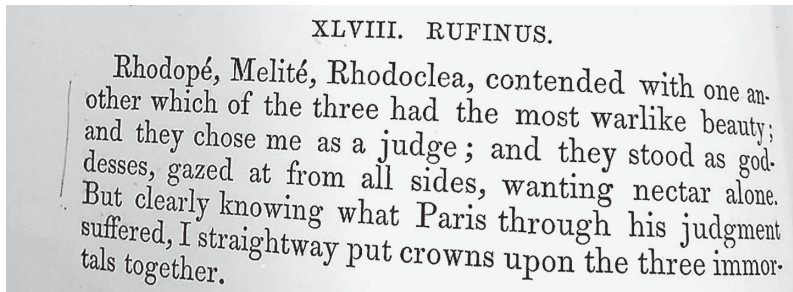
このような紹介に続いてハーンはこのエヴェヌスの詩を引用し、さらに散文訳に続いて引用されている韻文訳を「韻文訳のほとんどは失望するような出来だが、この翻訳はまあ許容できる程度によいと言えるかもしれないのでここで引用しておこう (Most of the verse translations are very disappointing; but in this case one translation happens to be tolerably good so that we may quote it)」(p. 442)と述べつつ引用している。

このことからわかるのは、ハーンは同書を、東京帝国大学における講義の準備のためにメモ書きをしながら読み解いていたという事実である。ちなみにこの講義の中で韻文訳が紹介されているのはこの1篇だけであり、それだけこの詩がハーンにとって重要な位置を占めていたこともうかがえる。この『ギリシア詞華集』の英語版が教科書版であるのは、あるいはこのように講義の材料とするのに最適であるとハーンが判断したためである可能性もあり、また、かつて自分の生徒時代に用いられていた書物であるがゆえに、散文訳・韻文訳含めて、講義で紹介するにふさわしい質のものであるとハーンが知っていたためであるかもしれない。いずれにしても、ハーンの講義の材料がこのように書き込みから裏付けられることになるのは、あながち無意味なこととは言えないのではないだろうか。

さらにこの詩は、『影 (*Shadowings*)』に収められた「セミ (SÉMI)」というエッセイの中にも引用されて、「ナイチンゲールに宛てたエヴェヌスの魅力的な呼びかけ (the charming *Adresse of Evenus to a nightingale*)」(p. 47) と紹介されている¹⁰⁾。

3-3. 74 頁

裏見返し左側に、「慎重さ (Prudence)」と書き込みのあった 74 頁の該当箇所は、本文では【写真 5】のように、左余白に鉛筆で縦に線が引かれている。

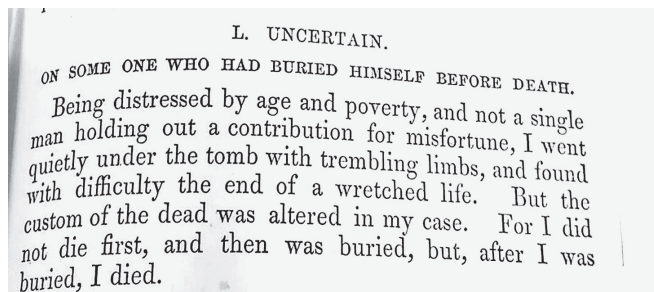


【写真 5】

これは、ルフィヌスの詩で、女神ロドフェとメリテとロドクレアの美を競う審判を頼まれた「私」が、かつて同じような争いで審判を務めたパリスの審判の末路を知っていたので、三柱の女神に即座に王冠を置いた、という内容である。この場合書き込みの「Prudence (慎重さ)」とは、この内容を要約した言葉であるということがわかる。この書き込みがハーンの当時の創作または講義に何らかの影響を与えたと言えるかについてははっきりとした例を挙げることはできないが、このようなエピソードもハーンの創作のどこかに小さな要素として織り込まれているのではないかということは推測可能であろう。

3-4. 75 頁

この詩については、裏見返し左側に、「タカツ - ムラの伝説 (類似) (Takatsu-mura legend (similitude W?))」という書き込みがある。本文該当頁には【写真 6】のように右余白に縦に線が引かれている。

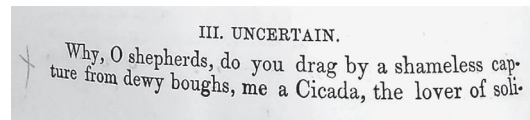


【写真 6】

線が引かれているのはこの節の下2行であり、「私ははじめに死んだのではなく、それから葬られたのであるが、葬られた後で私は死んだのだ (For I did not die first, and then was buried, but, after I was buried, I died)」とあり、この逸名の詩の冒頭の表題「死ぬ前に葬られたある男について (ON SOME ONE WHO HAD BURIED HISSELF BEFORE DEATH)」を言い換えて説明している文章でもある。これが、タカツ - ムラ¹¹⁾の伝説とどのように似通っているのかは今のところ不明であるが、生きたまま葬られるエピソードはハーンの怪異な物語によく見られるプロットであり、ハーンの一連の怪談には、日本の伝承だけでなく、『ギリシア詞華集』のこのような一節も影響を及ぼしているのではないかと考えられるのである。また、それよりもおそらく重要なのは、この書き込みを行った時期のハーンが、日本の伝説と『ギリシア詞華集』の一節に相同性を認めている点であり、ハーンの中で、日本と母なる国ギリシアとが分かちがたく結びついていたことが伺える点である。

3-5. 82頁

裏見返しに「セミ (Cicada)」およびその「無害さ (harmlessness of) と記述のある82頁の本文左側には、【写真7】のように×印が付けられているが、内容的には83頁まで続くものであり、詠み人知らずの以下の詩である。



【写真7】

Why, O shepherds, do you drag by a shameless capture from dewy boughs, me a Cicada, the lover of solitude, the road-side songster of the Nympha, chirping shrilly in mid-day heat on the mountains, and in the shady groves. Behold the thrush and blackbird, behold how many starlings are the plunderers of field-abundance. It is right to take the destroyers of fruits. Kill them. What grudging is there of leaves and grassy dew?

おお羊飼いどもよ、私のような露の命を捕まえて恥じるころはないのか、孤独を愛し、ニフの道連れの歌うたいで、山の昼日中や陰の多い茂みで金切り声で啼くこの身を。ツグミやクロドリを見よ、どれほど多くのホシムクドリが大地の実りの略奪者であるかを見よ。果物を破壊するものを捕まえるのは理にかなっている。奴らを殺せ。それにひきかえ葉や草の露を食むものがどれほど小さなものであることか。

これもまた、東京帝国大学の講義「虫に関する古代ギリシアの詩」で紹介されている詩であり、大変古い詩作の例として挙げられているもので、「極東の詩人たちと同じく、ギリシアの詩

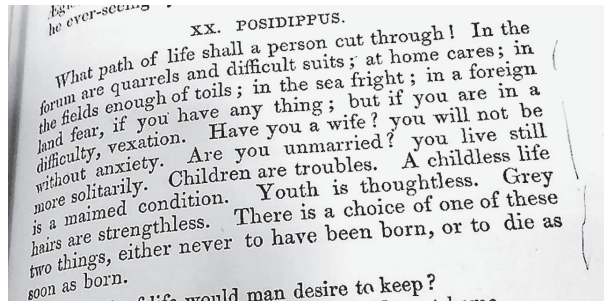
人たちもとりわけセミの無害さを賞揚している (Like the poets of the Far East, the Greek singers especially celebrated the harmlessness of the cicada) (p. 443) の例としてこの詩が挙げられている。

創作の面からみても、ハーンが「草ひばり」などの晩年のエッセイの中で、昆虫に代表される小さな命をめぐる嗜好を見せていることに連なる内容であり、ハーンの関心の在りかが伺える興味深い書き込みであるといえる。

3-6. 89頁

本文 89 頁には、裏見返して「人生の困難 (Trouble of life)」と書き込みのあった詩が紹介され、【写真 8】のように右余白に鉛筆で縦に線が書き込まれていることが分かる。

このポジディプスの詩の内容は以下のようなものであり、裏見返しの「人生のトラブル」という書き込みに呼応した内容となっている。



【写真 8】

What path of life shall a person cut through! In the forum are quarrels and difficult suits; at home cares; in the fields enough of toils; in the sea fright; in a foreign land fear, if you have any thing; but if you are in a difficulty, vexation. Have you a wife? You will not be without anxiety. Are you unmarried? You live still more solitarily. Children are troubles. A childless life is a maimed condition. Youth is thoughtless. Grey hairs are strengthless. There is a choice of one of these two things, either never to have been born, or die as soon as born.

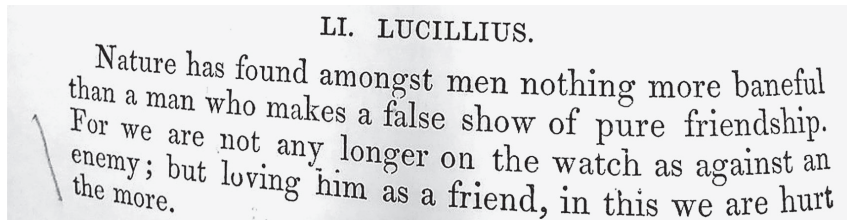
人間は何という人生の道をくぐり抜けなければならぬことか。広場には口論が広がり、困難が付きまとう。家には世話をしなければならぬ者がおり、畑には労苦がある。海には恐怖、外国には恐れ、何をしてもそれは付きまとい、困っているときには怒りを伴う。妻はいるか。いれば心配事から解放されることはないだろう。結婚していないか。それならもっと孤独に生きていることだろう。子供たちは厄介事の種である。子供のいない人生は何かの欠けた人生だ。若さは思慮に欠け、白髪は無力である。結局次のいずれかを選ぶほかない。決して生まれてこないか、生まれた途端にすぐ死ぬかである。

この詩の箴言めいた内容も、晩年のハーンのさまざまな物語で語られている死生観に影響を

与えているように思われる。ハーンは晩年仏教に傾倒したといわれているが、さらにそれは、このようなギリシアの箴言への回帰によっても補強されていたものと考えらえるのではないだろうか。

3-7. 106 頁

本文106頁には、裏見返しで「偽りの友情 (false friendship) と書き込みのあった詩が紹介され、【写真9】のように左余白に縦に線が引かれている。



【写真9】

この詩もまた、書き込みにある「偽りの友情」を物語る以下のような内容になっている。

Nature has found amongst men nothing more baneful than a man who makes a false show of pure friendship. For we are not any longer on the watch as against an enemy; but loving him as a friend, in this we are hurt the more.

自然は人間どもの間に、純粹な友情を偽って示す人間の中でも何よりも悪質なものを見出す。そういう輩を敵とみなす分にはまだよいが、友人として愛している場合には、そのことでより傷つくものである。

先の箴言に続いてこの詩で語られていることも、晩年のハーンの物語のそこかしこに散見される要素であるように思われる。『ギリシア詞華集』に見られる箴言は人類普遍の真理であると言ってしまうとそれだけのことであるが、それでもなおこのような箇所には書き込みがあることは、当時のハーンが人間の心理のこのような側面に関心を持っていたことの証左となるのではないだろうか。

3-8. 117 頁

裏見返しでは「空の空なるかな (vanitas vanitatum)」という書き込みがある本文117頁には、これまでのような鉛筆の書き込みは全く見られないが、同頁に収められている2編の詩を精査すると、2番目の詩が、「空の空なるかな」の意を物語っている詩であるように思われる。

My name. What is that to you? My country. For what purpose is this [told]? I am of a renowned race. What if of the most mean? After living with honour I departed life. What if without honour! And I now lie here. To whom art thou speaking thus?

私の名前、それが貴方にとって何のだというのか。私の国。なぜそんなことを言わなければならないのだ。私は誉れ高き血筋の者。それ以上に何の意味があるのか。名誉ある人生を送ったのち、私は生から旅立った。名誉がなければ何の意味もない。そして今私はここに横たわっている。貴方は誰に対してそのように話しているのか¹²⁾。

「空の空なるかな」は『旧約聖書』中「伝道の書」に見られる言葉であり、現世のむなしさを語る言葉であるが、これもハーンが晩年傾倒した仏教思想の中でも、日本独特のものと思われがちな無常観を上手く言い表した語であるといえる。もちろんハーンが仏教思想に傾倒していたからこそ『ギリシア詞華集』を読んでもこのように同じような着想の言葉に惹かれたのかも知れないが、いずれにしてもこの箇所にはハーンが関心を抱いていたこと、「空の空なるかな」という無常観に惹かれていたことは記憶にとどめておいてよいことだろう。

また、裏見返しにはこれに加えて、「165 頁と比較せよ (comp. p. 165)」という書き込みがあり、本文 165 頁には書き込みはないものの、グリコンの以下の詩が紹介されている。

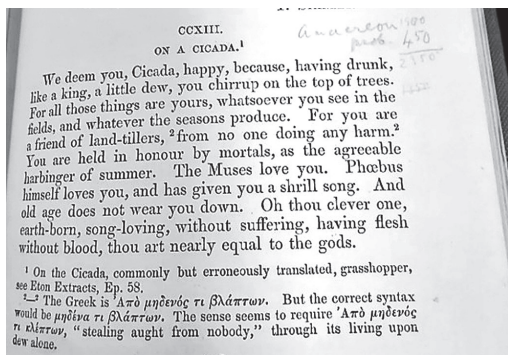
All things are a laugh, and all are dust, and all are nothing. For all are produced from things without reason. Children are cares, if they suffer some great evil, and cares too they are not a few, even when living. A good wife has in herself some delight; but a bad one brings to the husband a bitter life.

すべてのことは笑いであり、すべては塵、そしてすべては無である。すべてのものは理由なく事物から生み出され、子供たちは何らかの大病を患っていれば気がかりの種であり、子沢山であればまた生きていても気がかりである。良き妻というものはそれ自体いくばくかの喜びであろうが、悪しき妻というものは夫にとって辛い人生をもたらす。

この詩の内容も言うまでもなく、これまでに見てきたような無常観が反映された箴言であり、先の詩と比較すればその内容がさらに深みを増すようにも思われる。このような無常観が晩年のハーンの作品の随所に認められることもさることながら、この書き込みを行った当時のハーンの思考の流れをたどることができるのは、貴重なことだといえるのではないだろうか。

3-9. 147 頁

本文 147 頁には、裏見返しで××印が二つ付けられ、「セミ アナクレオン (Cicada



【写真 10】

anacreon)」という書き込みのあった詩が紹介されており、右余白に【写真 10】のように書き込みがある。

書き込みには、
Anacreon 1900
prob. 450
2350

という文字と数字があり、またその下部に 1350 という書き込みもある。おそらく

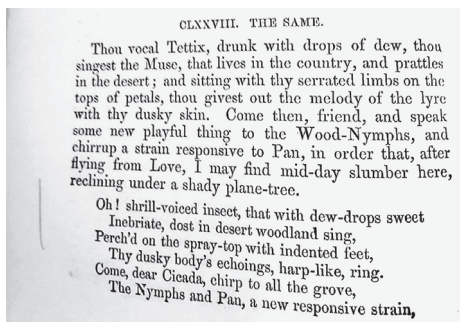
これらの数字は、1900 がハーンがこの書き込みを書いた年代、450 がアナクレオンの没年¹³⁾、2350 はその年代の開き、という計算が成り立つ。

この詩もまた東京帝国大学の講義で紹介されている詩 (p. 441) であり、また、「セミ」のエッセイの中でも、「ギリシアの詩人と中国の詩人が一つ以上の点についても完全な相同性を示している (on more than one point the Greek poet and the Chinese sage are in perfect accord)」(p. 45) 例として、この詩が「2400 年前に書かれたアナクレオンのセミに対する美しい呼びかけ (the beautiful address of Anacreon to the cicada, written twenty-four hundred years ago)」(p. 45) と紹介されている¹⁴⁾。

このようにして、1900 年頃のハーンが、講義の材料を『ギリシア詞華集』からこのような形で引用し、さらには創作にもそれを応用していた様子が、書き込みからも伺えるのである。

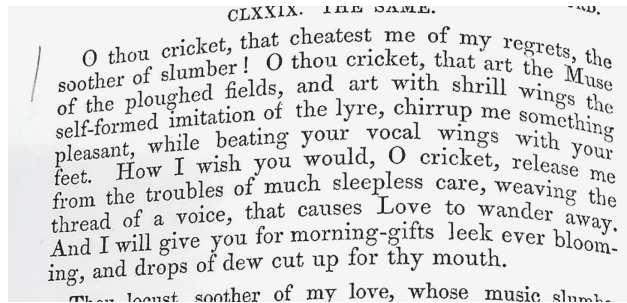
3 - 10. 216 頁および 218 頁

裏見返しでは、216 頁および 218 頁のところに、「くするく (く do く)」という記号めいたものが書かれている。内容を見てみると、216 頁には【写真 11】のように、韻文訳部分にかけて左余白に縦の線が引かれていることがわかる。



【写真 11】

このテティックス（ギリシア特産のセミ）を賞揚するメレアグロスの詩もまた、講義録で引用されている詩であると同時に（p. 441）、エッセイの中でもその前半部分が引用されている（p.47）裏見返しで同様の記号を付されている 218 頁の本文にも、【写真 12】のように左



【写真 12】

余白に縦線が引かれているが、これは同じメレアグロスの作ではあるが、セミではなくコオロギに宛てられた詩である。

この詩もまた、講義録では「ギリシアのすべての虫に関する詩の中でおそらく最も美しいものは、夜のコオロギに関するものである（perhaps the most beautiful of all the Greek poems about insects is a poem about a night cricket）」(p. 439)として紹介されている。同じ講義の中でハーンは、この小品の最大の美しさは、「声の撚糸を織りなす（weaving the thread of a voice）」(p. 439)ことで、それによって詩人に現世の憂さを忘れさせてくれることだとしている。ハーンはまた、この「声の撚糸」という表現が、「この小さな生き物のささやかな特質（"thin" quality of the little creature's song）」(p. 439)であるとも語っている。また、ハーンはこの詩の中でその音楽を「コオロギが脚で羽根を打って音を出すと正しく描写して（correctly described as striking its wings with its feet）」(p. 439)ことから、「ギリシア人がこの種の虫を実に詳細に観察していたことは明白である（It is also evident that the Greeks observe such insects very closely）」(p. 439)とも述べている。

この詩はまた、「セミ」のエッセイの中にも言及されており「夜のコオロギのさえずりから醸し出される感情を繊細に詠み上げている（delicate in sentiment on the chirruping of night-crickets）」点において日本の詩にほとんど劣るところがないとし（p. 46）、メレアグロスがこの小さな歌い手に贈り物として「新鮮なネギ（fresh leek）」と「小さく取り分けた草の露（drops of dew cut up small）」を与えようと約束するのは、「いみじくも日本的に聞こえる（sounds strangely Japanese）」(p. 46)としている。そしてこの記述はまた、ハーンの「草ひばり」等の中にも反映されているのである¹⁵⁾。

3-11. 276 頁

裏見返しでは「オマール・ハイヤーム（Omar Khayyam）」と書き込みのあった 217 頁には、書き込みはないが、以下のような詠み人知らずの詩が記されている。

How was I born? Whence am I? For what have I come? To go away again. How can I learn anything, knowing nothing? Being nothing. I was born. I shall be again as I was before. The race of voice-dividing (men) is nothing and nothing. But come, prepare me the pleasure-loving stream of Bacchus; for this medicine is the antidote of ills.

どのようにして私は生まれたか、私はなぜ存在しているのか、何のために私は来たのか、もう一度行ってしまうために。何も知らずして私は何かを学ぶことが出来るのか、何ものでもなく、私は生まれた。私はかつてそうであったものにまた戻るのである。声によってより分けられる種族（人間）は無の無である。しかしここに来てバッカスの楽しみを愛する小川を私に用意せよ、この薬は病を癒すものであるからには。

この詩の内容を読めば、裏見返しの「オマール・ハイヤム」という記述との相同性は容易に察しがつく。それは、『ルバイヤート』に示される世界観であり、先に見た「空の空なるかな」で示された無常観とも通底するものである。

ハーンは東京帝国大学において、おそらく1903年に、「エドワード・フィッツジェラルドと『ルバイヤート』」という講義を行っている¹⁶⁾。エドワード・フィッツジェラルド (Edward Fitzgerald, 1809-1883) は、1859年に『ルバイヤート』の英語訳を発表して英国で大きな反響を得た詩人であるが、ハーンもまた1888年版の同書を所有していた。書架番号 [97] Fitzgerald Rubaiyat of Omar Khayyam in English verse / Edward Fitzgerald. – New York, Houghton Mifflin. 1888. がそれである。同書にもまた、裏見返しにおびただしい書き込みがあるほか、本文にも、必ずしも裏見返しに示された頁というわけではなくハーンが特に関心を抱いたと思われる詩の余白に縦線が引かれている¹⁷⁾。そのように傍線の引かれた詩の一つに、ハーンが講義録の中で引用している以下の詩がある。

And if the Wine you drink, the Lip you press,

End in what All begins and ends in – Yes;

Think then you are TO-DAY what YESTERDAY

You were – TO-MORROW you shall not be less !

そしてもし君の飲むワインが、君の押し当てる唇が、

すべてが始まって終わるもので終わるならば、そう、

その時に思いなさい、君が今日あるのは、昨日そうであったものだと、そして明日もそれ以下のものではないことを。(p. 363)

しかしこの引用よりももっと注目すべきなのは、この後でハーンが述べているこの詩の解説

である。ハーンは「美は漂うもので、何物も永遠のものではなく、楽しみはすぐに色あせる、人生もまたそうである (beauty is fleeting, that nothing is permanent, that pleasure quickly fades)」(p. 363) とし、「人生は無に始まり無に終わる (life begins and ends in nothing)」のであるから、人に問われれば自分は「かつて過去にそうであったものに過ぎず、未来においてもそれ以下のものではありえない (only what you have been before in the past, and that you cannot be anything less than that in the future)」と答えるように勧めている。また、「すべてが幻であるとすれば、我々がその幻を好もうにも嫌おうにもさして違いはない (If everything be only illusion, then what difference does it make whether we like the illusion or dislike it)」とし、「世界の物事の永遠の秩序の中では (in the Eternal order of things)」の中では、自分がその幻を「喜びを持って受け入れようが、恐れて逃れようが、我々が美德に満ちていようがその反対であろうが (whether we accept it with joy, or shun it with horror, whether we are very virtuous, or very much the reverse)」そのことはあまり意味をなさない、とも述べているのである (以上 p. 354)。

これはこの短い四行詩の説明としてはかなり踏み込んだもので、むしろハーンの無常観を発展させて披歴していると考えられる箇所であるが、ここで見たように、ハーンが『ギリシア詞華集』の中にも同じような無常観を複数の箇所に認め、自論を洗練していったのだと考えれば、晩年の講義の中で言及されたこのような無常観の奥行きがある意味俯瞰できるようにも思われるのである。

このような世界観はまた、この講義と同時期に執筆されたものと考えられる『骨董』におけるエッセイ「露のしづく」の中でも、「永遠の秩序 (the eternal order)」の中で、「どのようなものであれ、あなたはかつて存在したのだし、どのようなものであれ、あなたはいま存在しているのだし、どのようなものであれ、あなたはやがてそうなる (Whatsoever was, that you have been; - whatsoever is, that you are; - whatsoever will be, that you must become)」として披露されているものでもある (p. 111)。

おわりに代えて

ここまで見てきたように、英語版『ギリシア詞華集』の裏見返しにおける書き込みと本文の該当ページにおける傍線は、東京帝国大学における講義や同時代に書かれた様々な作品の中にその反映が見出されるものであり、これまで直感的に連想されてきたハーンの知識の連環や連想の軌跡を客観的に裏付ける根拠ともみなされうるものであることが判明してきた。そしてそれは、時空を超えてギリシア世界と日本、そしてイスラーム世界をも結びつけながら、ハーン晩年の世界観を形成するのに寄与しているものであることも徐々に明らかになって来たのではないと思われる。本稿では紙幅の都合上裏見返し書き込みの前半部分、276頁までの分析と考察にとどまったが、次の論考では、同書後半の書き込みを精査することによって、さらにその広がりや例証し、同時代のハーンの世界観への同書の影響の全体像を探ってみることにしたい。

注

- 1) 書架番号および書誌情報は、『富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録改訂版』、富山大学附属図書館、1999年による。
- 2) 拙論「ラフカディオ・ハーン旧蔵書『ギリシア詞華集』仏訳版の書き込みについて—昆蟲譚と幽霊妻をめぐる—」『富山大学人文学部紀要』第66号、2017年を参照のこと。
- 3) このことについては拙論「エレディアを読むハーン」『日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集』第40号、2016年を参照のこと。
- 4) 杵掛良彦訳『ギリシア詞華集2』京都大学出版会、2016年、198頁を参照のこと。
- 5) Lafcadio Hearn, “A peep at Japanese poetry”, in *Essays in European and Oriental Literature*, Dodd, Mead and Company, 1923, p. 339. なお、ここでハーンが言及している和歌は、和泉式部の「あらざらむこの世のほかの思い出に今ひとたびの逢うこともがな」である。同書における和歌の引用については拙論「ラフカディオ・ハーンのニューオリズ時代における日本との出会い—「日本の詩瞥見」をめぐる—」『富山大学人文学部紀要』第67号、2017年を参照のこと。
- 6) このコラムにおける性の反転についても、上記拙論を参照のこと。
- 7) 同書「まえがき」vii頁参照のこと。
- 8) 裏見返しではこの詩の頁数の左側に×印が付けられている。裏見返しで×印が一つないし二つつけられているのは、いずれもセミあるいはコオロギに関する詩であり、×印がハーンの中での重要度を示しているのかもしれない。
- 9) 以下講義録からの引用は Lafcadio Hearn, *Complete lectures on poetry*, Tokyo, The Hokuseido Press, 1934. により、末尾に頁数のみを示す。
- 10) 以下作品からの引用は、Lafcadio Hearn, *Shadowings and A Japanese miscellany*, Houghton Mifflin Company, 1922年により、末尾に頁数のみを示す。
- 11) おそらく鳥根県益田の高津のことであろうと思われるが、現時点ではどのような伝説なのか同定するには至らなかった。
- 12) 余談ではあるが、この詩句が、前掲の拙論で示唆したように、ボードレールの散文詩「異邦人」を彷彿とさせるものであることは偶然の一致に過ぎないだろうか。
- 13) アナクレオンの生年は今日では紀元前570年頃とされていることから、この数字は没年の可能性が高いのではないと思われる。
- 14) ただし、講義録においてもエッセイにおいてもこの詩の書き出しが、同書にあるような「We deem you happy」ではなく、「We deem thee happy」と古語めいた表現になっていることも指摘しておこう。これはハーンが自身の嗜好を反映されたものなのではないかと考えられる。また、エッセイに見られる「2400年前」という記述は書き込みの2350年とは一致しないが、エッセイでは端数を切り上げて2400としたということも十分に考えられる。
- 15) さらに、ハーンがこのメレアグロスの表現が日本的なそれと類似していると述べている根拠として、「草ひばり」と同じくハーンの『骨董』に収められた「露のしずく」における露の描写も援用することが出来るだろう。
- 16) この講義の詳細については、Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Poets*, The Hokuseido Press, 1934, pp. 343-359を参照のこと。小論での引用は同書により、頁数のみを示す。
- 17) フィッツジェラルド訳『ルバイヤード』における書き込みとその講義またはハーンの創作との関連については精査の上、稿を改めて論じることにした。

本稿は、科学研究費補助金（16K13215）の助成による研究成果の一部である。